

万葉集 東歌の世界―石碑の路を中心に

北川 和秀

◎「石碑の路」の万葉歌碑のうち、上野国東歌は十一首、上野国防人歌は二首、未勘国東歌は八首ある。これらのうちの何首かについての解説を行う。

◎「石碑の路」の万葉歌碑のうち、東歌・防人歌以外の歌碑（柿本人麻呂や大津皇子など）の大半は大澤雅休氏（高崎市出身の書家。昭和二十八年没）の揮毫したものであることから、これらは大澤氏の顕彰も目的として歌碑を設置したものと思われる。

【上野国東歌】

①日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ（三四〇二）歌碑6

碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはつきりとお振りになった。

*「日の暮に」は枕詞。碓氷峠を越える日に、家の門口のあたりで別れた姿が忘れられない。

《参考》

*ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘れぬかも（四四〇七）上野防人歌

右の一首は、他田部子磐前のなり。

②吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも（三四〇三）歌碑4

私の恋は今も切ない。そして（多胡の入野の奥ではないが）将来も切ないことだ。

*「奥」には空間的な意味と時間的な意味とがある。それを掛けた。

*「かなし」は、どうしようもないほどの痛切な感情を表す語。

①「とても悲しい」「つらく切ない」という意味と、

②「切ないほどにいとしい」「かわいくてたまらない」という意味とがある。

畿内の歌では①の意味で使われることが多い。ところがこの歌では①の意味で用いられており、東歌の意味で使われることが多い。↓この歌の作者はあるいは国司などか。

*「草枕」は、通常は「旅」に掛かる枕詞。万葉集に四九例あるうち、四八例が「旅」に掛かっており、残る一例が「多胡」に掛かるこの歌の例である。なぜ「多胡」に掛かるのか分からない。当時、「草枕」といえば誰もが「旅」の枕詞である意識したのであるから、あるいは、この歌の作者は、この枕詞を用いることで、自分がこれから旅に出ることを暗示しようとしたのかもしれない。

③伊香保ろの岨そびの榛原はりはらねもころに将来おくをなかねそ現在ましかし良かよば（三四一〇）歌碑C
（榛名山の急斜面のハンノキ林の地中で絡み合っている根のように）こまごまと将来のことまで心配することはない。今さえ幸せならば。）

*伊香保は榛名山。「根もころ」は「ねんごころ」。

④伊香保嶺ねに雷かみな鳴りそね吾わが上へには故ゆゑはなけども子らによりてそ（三四二一）歌碑23
榛名山に雷よ鳴ってくれるな。私はどうということはないけれども、あの娘が怖がるものでね。

*「子ら」は彼女。単数。

⑤伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾あが恋のみし時なかりけり（三四二二）歌碑27
冬の間、毎日吹く榛名おろしだって、時には吹かない日もあるというけれど、私があなたを思う恋心ばかりは止むとぎがないことだ。

*冬の北西の季節風。榛名山の南東麓の地が舞台か。

《参考》

a 韓亭かんどうまり能許のこの浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし（三六七〇）

b 荒津あらかつの海潮しほひ干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ（三八九一）

⑥伊香保ろの八尺やさかの井手みでに立つ虹のじの頭あはろまでもさ寝をさ寝てば（三四一四）歌碑14

（榛名山麓の高い井堰いづきの上に現れる虹がはっきり見えるように）はっきり二人の仲が明らかになってしまうほど、共寝をしていられたらなあ。

*万葉集中、虹がよまれた唯一の歌。

《参考》

a 虹 にじ〇東国の小児このじと云。（『物類称呼』巻一「天地」）

*『物類称呼』は江戸時代中期の安永四年（一七七五）にできた方言集

b のじ 虹（『群馬県邑楽郡誌』前編附録「二、方言」）大正六年（一九一七）刊

c ノジと発音するのは注者の少年の頃にも村裡には行はれた。

（土屋文明『万葉集私注』三四一四番歌の語釈）

*土屋文明氏は、明治二十三年（一八九〇）西群馬郡上郊村保渡田生。

⑦利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）歌碑12

（利根川の浅瀬がどこなのかも考えずに闇雲に渡って波を受けてびっくりしたように）突然あなたに出会ってびっくりしたことだ。

*作者は女性。かつての体験を思い出して、比喩に用いた。

⑧ 上毛野可保夜が沼のいはるつら引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）歌碑 24

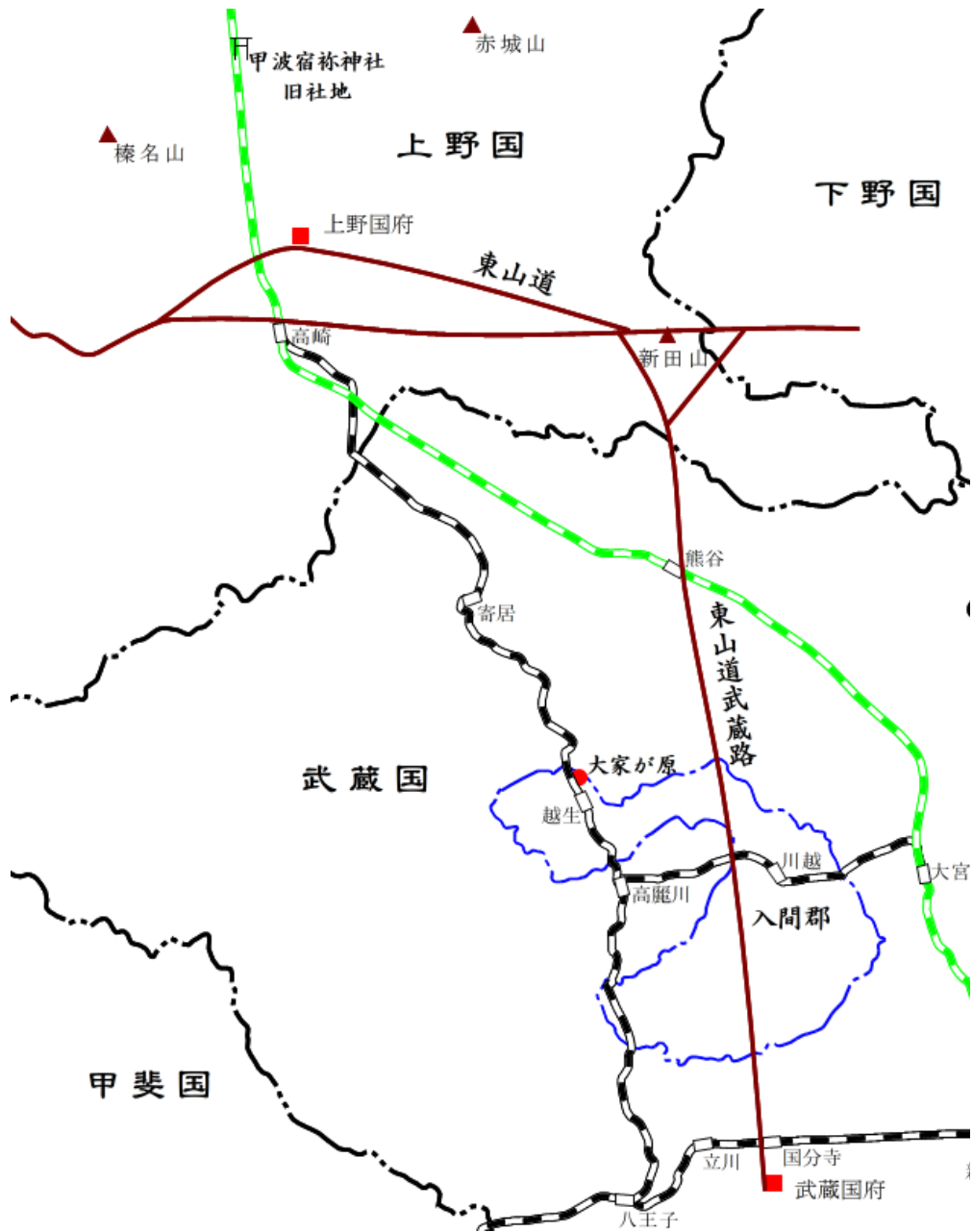
（上野国の可保夜の沼のイハキツラは、引っ張ってもずると寄って来て切れない。そのように）私との仲を絶やさないうで欲しい。

* 「いはる蔓」は蔓性の植物であるうが、何を指すか未詳。「い這ひ蔓」の東国方言形か。ジュンサイ（ぬなわ）説、スベリヒユ説などがある。

* 「ぬる」はずるとゆるるとゆるんでほどけること。

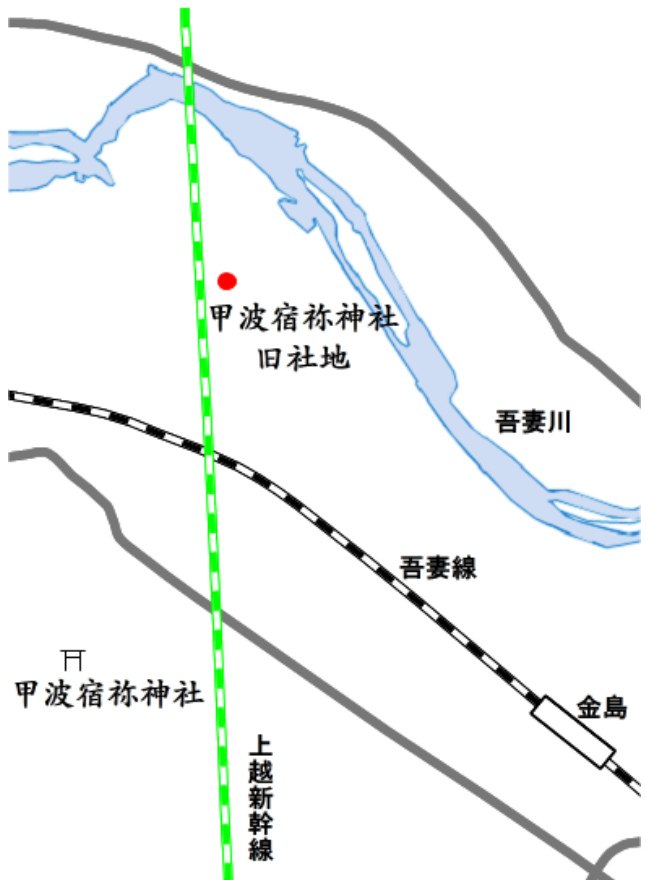
《参考》

a 入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬるぬる吾にな絶えそね（三三七八）武蔵東歌



b 西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん
光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、
その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。…名に高きかほ
やが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては俤すらなくなりしうへ、
また其地さへぞうせはてたる。（奈佐勝阜『山吹日記』天明六年「1786五月十三日条」）

* 「うのとしのわざはひ」は天明三年の浅間山の大噴火によってもたらされた災害。



⑨ 上野野伊奈良の沼の大藺草他所に見しよは今こそ益れ（三四一七）歌碑 D

上野国の伊奈良の沼に生えていた大藺草は、刈り取って織り上げた今の方が美しい。
|| 片思いの状態だったときよりも、恋人同士になった今の方が、あなたはもっとすてきた。

* 大藺草は大藺という植物で、藺草よりも大きい。「よは」は「よりは」という意

【上野国防人歌】

⑩ 難波道を行きて来までと吾妹子が着けし紐が緒絶えにけるかも（四四〇四）歌碑 ③

難波への道を行って帰って来るまで御無事だと、妻が着けてくれた紐が、長い旅で擦り切れてしまったことだなあ。

* 難波は通過点に過ぎないが、妻は理解していない

⑪ 吾が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも（四四〇六）歌碑 13

私の家に行く人がいてくれたらなあ。そうすれば、旅はつらいと告げに行ってもらわない。

* 防人として任地に赴く道中の望郷の歌

【未勘国東歌】

⑫ 佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか子ろが面に見えつる（三四七三）歌碑 3・G

（佐野山で打つ斧の音が遠くに聞こえるように）遠く離れたところにいるけれども、私と共寝をしたいというのか、あの娘の姿が面影に見えた。

* 「子ろ」は彼女。相手が思ってくれると、こちらの夢に現れるという発想

※これら以外の東歌の歌碑

【上野国東歌】

- ①上毛野佐野の荃立ち折りはやし吾は待たむゑことし来ずとも（三四〇六）歌碑25
上野国の佐野の菜を折っておまじないをして頻繁なお出でをお待ちします。今はたとえあなたがあまりお出でにならなくても。
- ②伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいぎ寝しめとら（三四〇九）②
榛名山から次々と雲が懸かってゆくようにしきりに騒いでいた人々が静かになった。さあ、共寝をさせてくれ、お前（あるいは「とらよ」）。

【未勘国東歌】

- ③東路の手児の呼坂越えがねて山にか寝むも宿は無しに（三四四二）B
東国へ行く道の途中にある手児の呼坂を越えられずに、山で寝ることだろうか。仮寝の場所もないままに。
- ④東路の手児の呼坂越えて去なば吾は恋ひむな後は逢ひぬとも（三四七七）A
東国へ行く道の途中にある手児の呼坂をあなたが越えて行かれたら、私は恋しいことでしょう。たとえ後で再会できるとしても。
- ⑤遠しとふ故奈の白嶺に逢ほ時も逢はのへ時も汝にこそ寄され（三四七八）8
遠いという故奈の白嶺であなたと逢うときも、逢わないときも、私はあなたといい仲間だと人から噂されている。
- ⑥伊波保ろの岨の若松限りとや君が来まさぬうらもとなくも（三四九五）④
（岩場の急斜面に生えている若い松ではないが）もう限界というつもりだろうか、あなたは来ない。私は心もとなく思っているのに。
- ⑦一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲の寄そり妻はも（三五一一）⑤
一つの峰のようだと（夫婦のようだと）人からは言われているけれど、実は青々とした峰の上でぐずぐずしている雲のようにためらっている、噂ばかりの妻は、ああ。
- ⑧妹をこそあひ見に来しか眉引の横山辺ろの鹿猪なす思へる（三五三一）11
私は彼女に会いに来ただけなのに、その私を横山あたりをうろつく鹿や猪のように思いやがって。
- ⑨阿須可川塞くと知りせば数多夜も率寝て来ましを塞くと知りせば（三五四五）7
阿須可川を塞き止めると知っていたなら、幾晩でもこっそりと連れ出して共寝をしたのに。塞き止めると知っていたなら。